

序論)

先週はペンテコステ礼拝で、使徒の働きからペンテコステは聖霊によるスタートダッシュをするための号令が鳴らされた日だ。というお話をしました。

聖霊様は私達にいのちを与え、主の臨在を示し、証しすることばを与えてくださるお方です。私達はその聖霊による宣教開始の号令がなった後の時代に生きています。そして、今、私達が読んでいるコリント人への手紙を書いたパウロも、その聖霊様の導きを受けながら、この世の知恵によるのではなく、御霊によって教えられたことばを用いていました（I コリ 2:13）。

なぜでしょうか？ 神様のことは、神の霊である聖霊様によらなければ理解することができないからです。

だから、パウロは2章の最後で、その聖霊様の導きを受けて救われた人たち、コリント教会の人たちに対して、「しかし、私たちはキリストの心を持っています」と断言しています。キリストの心というのは、主の知恵を教えてくださいと聖霊様のことです。

ところが、今日の箇所を見てみると、パウロは一転してコリント教会の人たちのことを御霊に属する人ではなくって、肉に属する人とか、肉の人という言い方をしています。なぜなのでしょう？

今日はこの第一コリント3章1節から4節を通して、なぜ、御霊によって救われた人たちのことをパウロは、肉の人といったのかを見ていきたいと思います。

大前提)

まず、本題に入る前に大前提として、主イエスキリストを信じて救われた人は、聖霊の導きを受けた人なのだ。ということを確認しておきたいと思います。

パウロの今までの言い方から説明するのならば、パウロは、人間的に優れた知恵のことばではなくって、人々から愚かと判断されるような十字架のことばで語り続けました。十字架のことばは、救われる人たちには神の力であり、聖霊様がそこに働かれることばだからです。更に説明しますと、第一コリント12章3節にはこのように書かれています。

12:3 ですから、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも「イエスは、のろわれよ」と言うことはなく、また、聖霊によるのでな

ければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません。

私達キリスト者はイエス様のことを主として崇めます。でも、そのようにイエス様を主として、救い主として告白ができるのは、聖霊様によらなければ絶対できないことなのです。だから、この信仰告白をしている私達は、聖霊様の導きを受けたものなのです。そういう意味では、キリスト者は全員、御霊に属する者のはずなのです。

1) 御霊に属する人向けに話せなかったパウロ

でも、パウロはコリント教会の人たちに対しては、御霊に属する人のように話すことができなかったのです。1節を読みましょう。

3:1 兄弟たち。私はあなたがたに、御霊に属する人に対するようには語るができずに、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように語りました。

クリスチャンは、救われたての人であったとしても、救われて信仰歴が長い人であったとしても、みんな聖霊の導きを体験した人です。

でも、パウロはコリント教会の人たちに対しては、御霊に属する人に対するようには語るができなかった。と言っています。

みなさん、この「語るができなかった」という言い回しは、本当は御霊に属する者として話したかったのだけれど、それができなかった。という言い方です。

パウロの本心としては、本当は御霊に属する者としてコリント教会を指導し、教育したかったわけです。それができなかったので、どうしたかということ、「肉に属する人」「キリストにある幼子」に対するように語ったのです。

みなさん、大人とこどもの違いってなんでしょう？ 最近はやりの AI に聞いてみると、大人とこどもの違いというのは、責任感があるかないかの違いだったり、感情コントロールができるかどうかの違いであったり、視野の広さをもっているかどうかの違いであったり、自分で学べるかどうかの違いだと説明されました。

まあ、確かにそういう面もあるかなと思います。ただ、責任感のない大人とか、感情コントロールができない大人とかもいますから、必ずしも AI の意見が正しいとは言えません。

私は、大人と子どもの最も大きな違いというのは、やっぱり人生経験の長さの違いだと思います。これを別な言い方をするのならば、人生に対する理解の深さの違い

い。それが大人と子どもの違いではないかと思います。

なぜ、こんなことを言っているのかというと、パウロから見たコリント教会は、御霊に導かれて救われた人たちの群れであるはずなんだけれども、その御霊によって導かれることや、御霊によって真理を深く理解することができない、御霊に満たされるという信仰経験の浅い幼子とみなされていたからです。

「いやいや、先生、コリントの教会は御霊の導きをいっぱい受けていましたよ。御霊の賜物をいっぱい持っていましたよ」という人も皆さんの中にはいるかもしれません。そういうふうに言う方はこのコリント人への手紙をよく読んでいる人だと思います。

確かにこの手紙の12章を見てみると、パウロは御霊の賜物について説明しています。詳しくは12章を扱うときにお話をしますが、そこには「知恵のことば」

「信仰」「癒やし」「奇跡」「預言」「霊の識別」「異言」「異言の解釈」「ほどこし」「管理」といった賜物が列挙されています。ということは、コリントの教会には癒やしや、奇跡、預言や異言といったことを聖霊様の働きによって実行することができる人たちがいたということです。

みなさん、教会で癒やしがどんどんなされ、奇跡がどんどん行われていったら、それはすごいことだと思います。恐らく聖書のことをよく知らない人たちは、癒やしや奇跡がどんどん行われる教会を見たら、「あの教会こそ、神様が働いている教会だ。」と言って、人々が殺到すると思います。

でも、パウロはそういった賜物を持っている人たちが多くいたコリント教会のことを、肉に属する人、キリストにある幼子と言ったのです。

それはつまり、パウロ視点からすると、御霊に属する人、信仰的に成熟した大人になっている人というのは、癒やしとか、奇跡とか、預言とか、異言とか、そういう聖霊による賜物、一見すると非常に霊的なことだと思えるようなことを、次々と行っていくような人のことではない。ということです。

誤解しないでいただきたいのは、私は、そういった御霊の賜物を否定しているわけではありません。それらはとっても素晴らしいことだと思います。でも、御霊の賜物を用いることができる人 イコール 霊的に成熟している人ではないのです。

そういうことができる人であったとしても、霊的には肉に属して、幼子のような状態の人もいるのです。コリントの教会はパウロからするとまさにそのような状態でした。

だから、パウロはどうしたかということ、幼子に語るように、子どもでも理解でき

るところ、コリント教会の人たちが受け取りやすい基礎的な部分だけを語ってきていたのです。

2) その理由

これはですね。ある意味では当たり前です。信仰を持ちたてで、キリストを受け入れて間もない人というのは、まさに霊的な赤ちゃんですから、最初から霊的に深いところ、難しいところを話すことはできません。

ただ、いつまでもそれでいいかというとそうではありません。2節を読みましょう。

3:2 私はあなたがたには乳を飲ませ、固い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。

「乳を飲ませ、固い食物を与えませんでした」というのは、御霊によって生きる人じゃないと、理解できないようなことは、教えることができなかった。ということです。

みなさん、聖書とか、主による真理というのは、いっぱい勉強しているからわかるということではありません。聖霊によって生きる。聖霊に満たされて歩む。ということがどういうことなのか、頭の中の知識ではなくって、実体験として、経験的にわかっていないと、聖書が教える真理の深みというのは理解できないのです。

コリントの教会は、聖霊によって導かれて救われ、御霊の賜物を使うことができていたけれども、それでも、聖霊によって生きる。御霊に満たされて生きるという人生経験がたりなかったのです。

だから、パウロは御霊に属する者として、硬い食べ物を与えるように、福音の真理の深みをコリント教会に与えることができなかったのです。

しかも、この手紙を送っている段階になってもまだ、コリント教会は御霊に満たされて生きることができていなかったのです。「実は、今でもまだ無理なのです。」というのは、そういうことです。

そして、この「実は、今でもまだ無理なのです」って言葉の中には、本当は、この手紙を送っている頃には、コリント教会の人たちが聖霊に満たされて生きる人生経験を豊かにしていて、硬い食べ物、キリストによる真理の深みを教えることができるそういう状態になっていたほしかった。というパウロの思いも現れていると思います。

みなさん、パウロが初めてコリントで伝道したのは50年ごろであり、そして、このコリント人への手紙第一を執筆したのが、54年から55年頃だと言われています。ということは、最初の伝道からこの手紙が書かれるまでには、約4年から5年の間があいているわけです。

みなさんは、主イエスキリストを信じてから何年になっているでしょうか。ここにいる方々の中には、信仰歴が5年以上の人も多くいると思います。そのように信仰歴の長いみなさんは聖書から硬い食べ物を受け取れる状態になっているでしょうか。聖霊によって生きる。御霊に満たされて生きるという人生経験を重ねて、福音の真理の奥深くを学べるそういう状態になっているでしょうか。

それとも、パウロから「今でもまだ無理」といわれてしまうそういう状態でしょうか。私達が聖書の真理、福音の真理の奥深くを知るためには、聖霊によって生きる。御霊に満たされて生きるという人生経験が必要なのです。

それは、異言で祈るとか、預言を語るとか、御霊の賜物をいっぱい用いるということではありません。むしろ、そういう目に見てわかりやすい御霊の賜物の発露ではなくって、ガラテヤ5章22節、23節でいわれているような御霊の実を実らせる生き方なのではないでしょうか。ガラテヤ5章22節、23節を一緒に読みましょう。

5:22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、

5:23a 柔和、自制です。

みなさん、私達が、主が求めておられる愛を実行するためには、聖霊様の導きを受け、聖霊様の満たしによって愛さなければ、それはできません。

愛以外の、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制 これらも、主が教えてくださっている意味で実行するためには、聖霊様に助けられて実行しなければできないのです。

みなさんは、この御霊の実を、聖霊様の助けを受けて、実らせ続けていく、そういう人生経験を積み重ねておられるでしょうか。

私達の人生は、イエス様を信じてそれで終わりではないのです。むしろ、そこから始まって、聖霊様の導きを受けながら、日々、このような御霊の実を実らせていくことが、私達の成熟への道であり、深い真理を受け取るための準備段階なのです。

3) 自分たちの状態を見分ける方法

では、私達が、自分自身を、御霊に属する者として歩めているのか、それとも肉に属する人、キリストにある幼子のままであるのか。どちらの状態なのかを見分ける方法は何でしょうか。

パウロは、コリントの教会の人たちがやっていることを見て判断しています。3節と4節を読みましょう。

3:3 あなたがたは、まだ肉の人だからです。あなたがたの間にはねたみや争いがあるのですから、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいることにならないでしょうか。

3:4 ある人は「私はパウロにつく」と言い、別の人は「私はアポロに」と言っているのであれば、あなたがたは、ただの人ではありませんか。

最初のころにもいいましたが、コリント教会には「自分はパウロ派だ」、「自分はアポロ派だ」、「自分はペテロ派だ。」という分裂がありました。そして、その分裂があるところには、ねたみや争いがあったのです。

この「ねたみ」と訳されているギリシャ語はゼロスということばで、熱心とか、熱意、情熱 という意味をもっています。

みなさん、熱心、熱意、情熱 っていうのはいいことばですよ。でも、聖霊によらない熱心、御霊の実を伴わない情熱というのは、妬みとか、嫉妬とか、悪意、そういうものに発展してしまうのです。

事実、教会分裂とかする人は、非常に情熱的だったり、熱心だったりする人が多いのです。自分たちこそ正しい！ 自分たちこそ正義だ！ そういうふうに信じて、他の人たちを受け入れなかったり、愛さなかったりすると、教会が分裂したり、争いを起こしたりするのです。

みなさん、間違った熱意、聖霊の満たしを伴わない熱心というのは危ないということ覚えてください。

聖霊の導きを受け、聖霊に満たされながら、熱心に人を愛し、喜びや平安を作っていく。そして、あの使徒たちのように大胆にキリストを宣べ伝えていく。そういう熱心はいいんですよ。でも、人間的な熱心によって教会生活をしたり、人間関係を構築したりしていくときに、いつのまにか、それは御霊の実ではなくって肉の行いをするようになってしまうのです。

だから、私達は自分たちが肉の行いをしているのか、それとも御霊の実を実らせているのかによって、自分の状態を判断することが大切だと思います。

パウロは、コリント教会の人たちが肉の行いの一部であるねたみとか、争いとか、分裂、分派をしていたから、彼らのことを肉の人といったのです。

先ほど、ガラテヤ人への手紙から御霊の実を見たので、肉の行いもあらためて見てみましょう。ガラテヤ 5 章 19 節から 21 節を読みます。

5:19 肉のわざは明らかです。すなわち、淫らな行い、汚れ、好色、
5:20 偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、
5:21 ねたみ、泥酔、遊興、そういった類のものです。

まさにこの肉のわざの中に、コリント教会の人たちが行っていた ねたみ、争い、分裂、分派がありますね。

みなさん、私達はどうでしょうか。コリント教会が、ねたみ、争い、分裂、分派をしていて肉の人といわれるのならば、私達もこのような肉のわざを行いつつ、信仰生活をしている。そのような矛盾した状態になっていたならば、御霊に属する者ではなくって、肉に属する者として歩んでしまっていることになるのではないのでしょうか。

だからこそ、パウロは、ガラテヤ人への手紙で肉のわざと御霊の実を列挙した後、このように言っています。

5:24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、情欲や欲望とともに十字架につけたのです。

5:25 私たちは、御霊によって生きているのなら、御霊によって進もうではありませんか。

結論)

パウロが今日の箇所、I コリント 3 章 1－4 節で言いたいことも同じだと思えます。御霊に導かれて救われて、御霊に属する者とされているはずのあなたたちは、いつまでも肉に属する者として歩んではいけません。

御霊に満たされて、御霊によって生きて、本当の霊的な真理であり、御霊に満たされて生きる者だけが理解することができる。そういった福音の深みを悟ることができるように成長しなさい。

そのように今日のみことばは私達に語っているのではないのでしょうか。

★応答の時

今、しばらく、みことばに応答する時を持ちましょう。

みなさんは、キリストを信じて何年たったのでしょうか。

みなさんの霊的な状態は幼子の状態から抜けて、霊的に成熟した大人になっているのでしょうか。

今あらためて自分の歩みを吟味してみましょう。

あなたは、日々の歩みの中で、肉のわざを行っているのでしょうか。

それとも、御霊の実を実らせているのでしょうか。

ねたみや争いをしていなくても、憤りに支配されていたり、情欲に押し流されたり、主以外のものにのめり込んだりしていないのでしょうか。

もし、そうならば改めて、聖霊様の満たしを求めていきましょう。

聖霊に満たされ、御霊の実を実らせる人生を歩めるように祈りましょう。

また、今、聖霊の導きを求め、自分の生き方をどのように変えるべきなのか、御霊に教えられる時を持ちましょう。

そして、もし具体的に家族を愛しなさいとか、誰かの罪を許しなさいとか、寛容な心をもちなさいとか、そういう導きを聖霊様が、今、みなさんに与えているのなら、それに従う決心をしましょう。

しばらく、沈黙の中で聖霊の導きを聞き、応答するときを持ちましょう。

示された決心を週報のわたしの応答の欄にご記入ください。